

地域畜産振興部門

青森県上北郡東北町
有限会社 東北牧場

(代表：代表取締役社長 九十九ひろ子)

軽種馬牧場の新たな挑戦
—地域資源の活用による
有機農業・養鶏への取り組み—



東北牧場のみなさん

有限会社東北牧場は、軽種馬牧場を営みながら、安全・安心を迫及した自家産有機栽培トウモロコシや地元産飼料を利用した採卵養鶏、自家産たい肥の完全利用による有機野菜生産に取り組み、耕種と畜産の連携による複合型有機農業システムを確立している。

現代表の九十九氏が昭和62年に就任し、農事部を設置、地元生産農家の夫人を雇用して無農薬・無化学肥料の野菜栽培に着手した。当初は自家利用が目的であったが、徐々に拡大し平成7年より一般販売を開始している。一方、平成12年からは安全・安心な鶏卵生産を目指して、飼料用トウモロコシを有機栽培しつつ、地域資源をともに利用し、さらに鶏の生理生態に適した環境での採卵養鶏に取り組んでいる。なお、両部門の生産活動にあたっては、軽種馬牧場の広大な土地を畑に、また施設を鶏舎や資材倉庫、集荷・選別場として有効利用してきた。

採卵養鶏の特徴としては、何よりも地域資源にこだわった飼料の利用である。6haある畑のうち3haを利用して生産した有機栽培トウモロコシと自家産有機生産野菜の収穫くず、地元有機農家が栽培した小麦やナタネ、漁港からはホタテ貝殻や魚粉かすなどを調達し給与している。このように全量を国産飼料でまかなうことすら珍しい今日の飼料事情にあって地元青森県産のみを給与していること、それがほぼ有機的なものでまかなわれていることが特徴的である。また、全国漁獲量第2位を誇るホタテの副産物でその処理が社会問題にもなっていた貝殻の飼料利用については、県で試験研究が行われる以前から利用していたことから、その後発表された試験研究機関の研究結果を実証する役割を担い、県内養鶏農家における利用の普及にも貢献している。

このほか、1m²当たり0.5羽という飼育密度、止まり木の設置や野菜の常時給与など鶏の生理生態に配慮した飼養環境で生産している。さらに今年4月からは青森県畜産試験場が作出した特産鶏品種での生産を予定しているなど、まさに地域を生かし、地域の上に存立する畜産経営である。

一方、有機野菜については、馬場内に6haある畑のうち残り3haで50種類以上を生産し、牧場周辺の林で採れるキノコ、山菜などとともに販売している。牧場内から出る馬ふんと鶏ふんをたい肥化し、全量を畑に還元しており、完全な資源循環型農業が営まれている。なお、生産野菜については、平成16年に有機JASマークの認定を受けている。

販売については、全量をこだわりレストランとインターネットを活用した消費者への直接販売という形態を採用して付加価値販売を行っている。とくに直接販売については、専門職員を設置し、積極的な情報交換を行って顧客の確保に努めている。

以上のように取り組んできた内容は、軽種馬経営における養鶏部門の導入、養鶏経営における有機的な飼料の導入等という形ですでに地域の他の経営に普及している。

さいごに当牧場は、馬産地青森の軽種馬経営の中でも比較的大規模な牧場に分類される。このように地域で代表的な軽種馬経営が、地域資源を最大限に活用し、安全・安心な食料を追求した畜産・農産物の生産に取り組んでいることが特徴的であると同時に、取り組みを行うこと自体がユニークでかつ地域のPRにも少なからず貢献している。

▼馬場とトウモロコシ畑

馬場に隣接し、野菜との輪換でトウモロコシを栽培している。



▼トウモロコシ畑

採卵鶏飼料用のトウモロコシは有機栽培している。



▼トウモロコシの飼料化

収穫したトウモロコシは乾燥させ飼料化。



▼鶏舎内部

鶏舎はゆとりを持って飼育されている。



▼有機野菜

東北牧場では、有機野菜の生産も行っている。



▼身土不二

生産された鶏卵は「身土不二（しんどふじ）」の名称で販売されている。

